

假屋の衰退と「當屋制の發達」との相關的な事情が、宮座の歴史的過程に考へられねばならぬと思ふ。なほ今日當屋制を存してゐながら、宮座の組織をもたぬ神社は全國に數多く存在してゐるのである。

翻つて近江の宮座の現状を概観すれば、一般に衰微の傾向を辿つてゐると言へよう。既に座の組織を失つた神社も尠からずあり、又株座から村座へ再組織されて存在するものもあると言はれてゐるが、滋賀・高島等の湖西地方よりも湖東殊に神崎以南の諸郡に宮座の事實が濃厚に残存するのであつて、湖北方面は特に行ひが一般的に行はれてゐるが、所謂宮座の事實は比較的不充分であると言はれ、且つ當屋決定の方法に就いても、南部が座入順、年齢順或ひは質習的な順序等の豫測し得る方法によつてゐるに對して、江北の行ひの盛なる村々には、神籤による豫測を許さぬ選定手段がとられてゐることも興味深い現象である。

近江の宮座はある雑多性を持ち、その限界が明瞭でない。そこに理解の困難と従つて記述のむづかしさが伴つてゐると、著者は曾て述べられたが、今やそれらの困難を克服された。民俗的現象の雑多性は、著者の歴史學的方法によつて鋭くも統一を與へられたのである。

この偉大なる努力に對しては重ねて最高の敬意を表し、併せて自ら拙らず敢て蕪言を陳ね、禮を失するところあらんかを思ひ、御海容を冀ひ、今後の御示教を俟つ次第である。(四六倍版本文四四七頁。圖版一九頁・東京文理科大学發行、非常品)(平山敏治郎)

日本古文化研究所報告 第八

法隆寺西圓堂奉納武器

末永雅雄著

養老二年橘大夫人の發願によつて創立せられたと傳へらるゝ法隆寺西圓堂の藥師如來が、我國に於ける藥師信仰の勃興と共に、「峯の藥師」と呼ばれて一般民衆の信仰の對象となり、その歸依による奉納品が堂の内に懸架されてゐる壯觀は人のよく知る所である。

此等奉納品の精密なる調査は、只に我國武器沿革史研究の上に於て重要なのみならず、その宗教的意義も亦重大であると言はなければならぬ。而して昭和十年九月堂の修理を機會に、日本古文化研究所の依頼による末永雅雄氏の滿二ヶ年にわたる調査の結果が本報告書である。

西圓堂奉納品の調査の意義は前述の如く、その傳存する多數の武器を本邦武器沿革史上に於ける「一括資料」として究明する一面と共に、「峯の藥師」としての本堂の信仰が、それら奉納品と如何に關係して居たかと言ふ宗教的意義の二面に存する。

- 而して末永氏が本報告書を編するに當つて、第一 總説として
- 一、西圓堂と奉納品
 - 二、西圓堂奉納の武器
 - 三、奉納の意義と特質

として専らその宗教的意義の究明に、第二、資料を

一、刀劍

二、鎧、長刀

三、弓、鐵砲

四、甲冑

なる四章に分つて、奉納品自體の精密なる調査の報告に當てられた事は、同氏の調査方針が全く右の二方面にその重點を置く事を示すものに他ならない。

而して著者はその總説一、西圓堂と奉納品 に於て、西圓堂本尊藥師如來が、平安朝時代以後の本邦藥師信仰と結び付く事によつて法隆寺内に於ける民間信仰の中心となつた事情を、更に二、西圓堂奉納の武器 に於ては、その紀年銘に依つて奉納品の年代的考證をなし、それらが主として戰國時代を中心として奉獻されてゐる事を究め、更に三、奉納の意義と特質 に於ては、本來衆病退散、現世安穩」の利險を主とした藥師如來の信仰に對して武器の奉納は一見奇異に見ゆるも、その祈願の意趣は、この堂に於ては「武運長久」に存するのではなくしてやはり「病平安、子孫繁榮、如意満足」にあつた事を證し、それは武器自體が元來有する諸悪退散の觀念と、捨身の思想が藥師如來本來の利險と結び付く所より來るものである事を説いてゐる。而も現在この堂に傳へらるゝ奉納品は建長元年再建以後のものであり、武器に對する深い信頼を有した戰國時代を中心とする上からも、それは當然であるとしてゐる。

勿論以上に於て宗教的意義の上から西圓堂藥師如來と奉納武器の關係がすべて究明し盡されたとは考へられない。本堂が藥師信仰の勃興に伴つて如何にして特に一般民衆の支持を得るに至つたかの問題、又戰國時代を中心とする現在傳存せる武器が奉納されし時代の事はともかく、それ以前に於ける西圓堂の藥師如來に對する民間の信仰は如何なるものであつたか等に就いては未だ考究の餘地はあると考へる。しかし乍ら奉納武器自體の調査のみを事とせず、かゝる歴史的立場に立つ解釋を本書の最初に於てなした事は、次の資料の研究の價値を更に大ならしめたものであると言はなければならぬ。第二、資料 に於ける奉納品自體に就いての研究は今一々紹介するの煩を避けるが、本堂が我國武器沿革史上に占むる位置が他に類例の少い程重要であるだけに、それだけ著者の努力と炯眼に依る所多きこの報告書の價値は大であらう。尙宇野傳三博士の鐵組織の顯微鏡寫眞を加へる事により科學的研究の上にも完全を期して居る事は更に本書を權威付けるものであり、その學的價値は甚大であらう。(四六倍版、本文八五頁、圖版四七、日本古文化研究所發行)(清原宣雄)

Monumenta Nipponica

—Studies on Japanese Culture, Past and Present.—

Vol. I, No. 1 & 2, 1938

上智大學編